

みめぐみの

第33部



みめぐみの

第33部



◎

大谷光道著

目次

ほととぎす	2
極楽ではないけれど	5
十七回忌も近い	8
死の縁、無量なり	9
死の縁、無量なり	11
備えあれば	15
秤のたとえ	16
阿弥陀様と本願(四)	20
「立ち見席」はない	21
成仏はどこで?	25
読者の貢	29
あとがき	31

ほととぎす

皆様のおかげで、この嵯峨野に土地が確保できて寺務所もできて二年半。

いつも春になると、ウグイスが鳴きます。それは当たり前で、ウグイスは日本中どこへ行つても鳴いています。それで、ウグイスは珍しくもなく何の感激もない鳥だと思つていました。その罰があたつたのか、今年はちよつとも鳴きません。



梅雨空にけぶる小倉山(右)と嵐山(中央)

本願寺から望む

また、どこからか来るのか、裏山のどこかに棲んでいるのか、いつもこの時期になると鳴いてくれるのが、フクロウです。「ホツホホツ」という声が何とも珍しく、その鳴き声通りほつとします。

もう少しすると、ホトトギスが鳴きます。これはまことにすばらしい声で、メロディーもさることながら、ほかの鳥と違つて辺り中に響き渡るところが、何とも格別です。

ところが、鳴いてほしいときには鳴いてくれない不思議な鳥で、また反対に、鳴きだすとするさいほど鳴くという変わった鳥です。ここに来られた方に「うちはホトトギスが鳴くんですよ」などと自慢話をしたときに限つて、鳴いてくれません。嘘を言つているのかと思われるのが嫌なので、何とか鳴いてくれないかと強く念じるのですが、鳴かない日はどうしても鳴いてくれないので。こういう不思議な鳥です。

三人の天下人の性格の違いが川柳に詠まれているのは有名ですが、おそらく

く「鳴いてほしいときに鳴いてくれない」ことからその題材になつたのでしよう。

「なかぬなら殺してしまへ 時鳥

ほとときす

織田右府

（織田信長）

「鳴かずともなかして見せふ 杜鵑

ほとときす

豊太閤

（豊臣秀吉）

「なかぬなら鳴まで待よ 郭公

ほとときす

大權現様

（徳川家康）

（平戸藩主・松浦清の隨筆『甲子夜話』）

ホトトギスは、和歌や俳句に卯の花うや橘たちばなとともに初夏を告げる鳥として登場し、杜鵑・霍公鳥・時鳥・子規・杜宇・不如帰・沓手鳥・蜀魂・田鶴など、多くの字を当てることから、人々の心に種々の思いを起こさせる鳥であることは間違いないようです。私はまだ正体は見たことがないのですが、カツコウ（郭公）と極めてよく似ているそうです。そのためか、郭公と書いてホトトギスと読ませることもあるようです（右記、家康の例）。

この鳴き声は辞書によると、「ほっちゃんかけたか」とか「てっぺんかけ

たか」と聞こえる、と書いてあります。小さい頃に母から「『本尊かけたか』と鳴くのよ」と教わっていたので、それがどこかにないかと探してみるのですがどこにもありません。母にだけ「そう聞こえた」のでしょうか。いずれにしても、私の「三つ子の魂（百まで）」には、「本尊かけたか」と尋ねてきます。

その声を聞くたびに、はっと、「お御堂の御本尊のお莊嚴しょうごん（お飾り）、ちゃんとしてあつたかな」と思って、「南無阿弥陀仏」。

極楽ではないけれど

『阿弥陀經』の始めのほうに、「極楽にはめずらしい鳥がいて、これは説法になつてゐるのである。極楽には畜生はいないので（阿弥陀様の本願・第一願『第三十部参照』）、これは鳥に見えるけれども実は阿弥陀様が姿を変えて説法されているのである」と書いてあります。このことが思い出されま

す。もちろんここは極楽ではありませんが、ホトトギスにお説教されて「あつ、お念佛やな」と、いつも思い起こさされているようなことです。

『阿弥陀経』のその部分を意訳してみましょう。

また次に舍利弗よ、かの国（極楽）にはいろいろと珍しい不思議な鳥がいる。白鵠・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命鳥などである。これらの鳥は、昼と夜、一日に六回なごやかでみやびやかな声で鳴いている。その声はちょうど、五根・五力・七菩提分・八聖道分などの修行法を説き述べている。その国の衆生たちは、この声を聞いて、みな仏を念じ、法を念じ、僧を念ずるのである。舍利弗よ、そなたは、この鳥が罪の報いによつて（鳥という畜生に）生れたものであると思つてはならぬ。なぜなら、かの仏の国には、三悪道がないからである。舍利弗よ、かの国には三悪道の名すらもないのだから、その実体があろうはずがない。これらさまざまの鳥は、みな阿弥陀仏が法をのべひろめようとされて、形を変えてなさつているところなのである。

（三悪道＝地獄・餓鬼・畜生の三つの境界。

（『仏説阿弥陀経』より）



白鶴＝鶴の一種で、白鳥また天鷲とも。 舍利＝(Sarika)水鳥の一種。黒色で人間の言葉を暗誦するという。 迦陵頻伽＝(Kalavinka)妙音鳥とも。上半身は美女、下半身は鳥の姿。美しい声で鳴くという。その美声を仏の声の形容とする。 共命鳥＝(Jīva-jīvaka)命々鳥ともいい、身体は一つで頭と心を一つもつ珍鳥。

近々、ホトトギスが説法を聞かせてくれます。又その季節になれば聞きに来ていただきたいと思います。しかし、そういう時に限って鳴かないかもしれません。今日鳴かなれば明日来ていただければ鳴くかもしれません。

もうすぐ、ホトトギスが私の三つ子の魂に話しかけて、「坊主の不信心」に気づかせてくれる季節がやつてきます。

十七回忌も近い

早いもので、来年はもう前門様の十七回忌です。前門様のお育てをこうむるのは、生前のことに留まらないということが少しずつわかつてきました。一番身近にそれを感じるのは、前門様とご縁の深かつた方々が、このホトトギスではないけれど、私の身の回りで陰に陽に私を助けてくださっているということです。

死の縁、無量なり

最近、中国のチベットに対する宗教弾圧に端を発して、チベットの人たちによる北京オリンピックの聖火リレーへの抗議や、さらに中国でのフランス系スーパーに対する不買運動などで、世界中が揺れております。チベットのダライ・ラマ法王は五十年前に亡命してインドで拠点を置いて活動されていて、今もチベット国内で多くの僧侶やチベット国民が命がけで仏法を守ろうとされているのですが、それに比べて同じ仏教徒でも私共はたいへん穏やかな日々を送らせていただいているのが、誠に心苦しいこの頃です。

日本の歴史の中でも、隠れ念佛であるとか、あるいは隠れキリストンである

とかの弾圧がありました。

しかし考えてみると、今

日の日本のように極楽の

ような楽な生活をさせて

もらっている時代であつ

ても、そういう弾圧の中

でお念佛を称えていた時

代であつても、時代とか

この世の生活がどのようであるかとは全く関係なく、私たちがいすれこの娑
婆とお別れして別の所へ行かなくてはならないという現実には、何の変わり
もありません。

また、昔は「人生五十年」と言われたのですが、最近は医学の発達で平均
寿命が伸びていて、「人間は百四十歳まで生きる身体にできているのだ」な



蓮如上人御絵伝・絵解き(4月12日)

どという説もあるようです。しかしそれにしても永遠に生きられるというものではありません。

そしてさらに、このようなこの世での苦楽や寿命の長短のこととは別に、私たちには自分がどんな死に方をするのかもわかりません。

死の縁、無量なり

これらのことふまえて、私たちがどのような心構えを持つていなければならないかが明らかにされているのが、覚如上人の『執持鈔』です。抜粋して以下に意訳します。（原文は末尾）

……一切衆生のありさまを考えると、過去の業因ごういんはまちまちである。また死の縁は数知れないほどいっぱいある（原文「死の縁、無量なり」）。病に冒されて死ぬ者がある。剣にあたつて死ぬ者がある。水におぼれて死ぬ者がある。火に焼けて死ぬ者がある。あるいは、寝死する者がある。

酒に酔い狂つて死ぬ類がある。これは皆、今までの行いの結果であつて、全く逃れることは出来ない。このような者たちは、死期に至るとふと迷いの心を起こすのが関の山で、どうして凡夫の類が一心に念佛を称える心が起こつたり、淨土に往生したいと願う心が起くるだらうか。平生のとき期待している約束がもし守られないならば、往生の望みは虚しくなることになる。それなので、平生の一念によつて往生の得否は定まつているものなのである。平生のとき定まらない思いであるならば（往生は）きつとかなわないだらう。平生のとき善知識の教えのすぐ後に「帰命」というひと思いが起こつたならば、そのときをもつて娑婆の終わり、臨終だと思えるはずだ（いつ死んでもいいと思えるはずだ）。

業 因＝苦樂の報いを受ける原因となる善惡の行為。

善知識＝教えを説いて仏道・覚りへと導いてくれるよき指導者。

帰 命＝己れの身命を投げ出して仏に帰依すること、仏の教命に帰順すること。

（覚如上人御作『執持鈔・五』より）

この中でまずはじめは、「死の縁、無量なり」です。私たちにはいつ何時、死が訪れるかも知れません。そしてどんな死に方をするかもわかりません。それは皆、「今までの行いの結果であつて、全く逃れることが出来るものではない」のです。

私たちは日常的には、死に至った直接の原因を死因と言いますが、仏教ではこれを「因」と言わず「縁」と言います。そのわけは生まれたこと 자체がすでに死の原因になつていてからで、何らかの「縁」が催せば死に至ると考えるのです。「人間はだれでもいつかは死ぬものである」という常識からすると、このお釈迦様の考え方のほうが安定感があるのでないでしょうか。一度考えてみてください。

さて、『執持鈔』にあるように、多種多様の死の縁について考えてみると、死期が迫つたとき、覚如上人の仰るように、苦しみや動転のため「とてもお念仏を称えるどころではない」ことが、なるほどと頷うなずかれています。また、

もし信心もなく一度も念佛を称えたことがなく、さらにその人がそれまでに何一つ善い行いをもしていなかつたのであれば、行く先はただ一つ——私の知る限りですが——地獄しかないのです。

それでは、どうすればいいのか。

それで『執持鈔』には、このように死期・臨終が近づいたときではなく、「平生の一念によつて往生の得否は定まつているものなのである」とあり、つまり、平生の元気なときに信心が決まつたならば、その時に極楽に往生できることも決まるのです。さらにここで、信心とは具体的には「教え導いてくれる人（善知識）の言葉を聞いたあとに「帰命」、つまり阿弥陀様に自分の身をゆだねる思いになることだ」とも説かれています。

このようなことから、私たちは、臨終が近づいたときに慌ててているようでは往生が危ぶまれるので、「どうしても平生のうちに信心をいただいておかなければいけない」ということがわかつてきます。

備えあれば……

何事も、いざというときのために予め準備しておくことは安心につながるもので、私たちのご信心も例外ではありません。

そう考えると、「転ばぬ先の杖」「備えあれば患(うれい)（憂え）なし」という二つの諺が頭に浮かびます。西洋でも「暗くならないうちにランプに灯をつけよ」とか「雨の日のために何かとつておけ」というのがあり、これは洋の東西を問わぬ常識なのでしょう。

「往生の準備をしておくことは、いざというときに慌てないように予防しておくことである」、もつと極端に言うと、「往生の準備をしておくことは、いざというときにでも地獄に墮ちないですむ」ということです。

反対の諺は「盜人を見て縄(なわ)を綯(な)う」、いわゆる「ドロナワ」です。『執持鈔』もこのドロナワのたとえにならないように「死の縁、無量なり」と、懇

切丁寧に説いてくださっています。

秤のたとえ

私たちの行いはどんな場合でも必ず一定の結果を生みます。行いとその結果がワンセットになつていることに着目した行いのことを「業」と言います。そして、行いとその結果との結びつきが強いものほど、確実な結果が約束されているのです。

これを曇鸞大師（七高僧第三祖）は、秤はかりをたとえにして、重いほうが下に強く引くように、業も強いもののほうが優先的に引っ張るのであると、教えられています。

業道經に言はく、業道は秤のごとし。重き者先づ牽ひくと。

業道經＝『道地經』などの業道因果の道理を説いたお経。

（曇鸞大師御作『淨土論註』ろんちゅう）

「本願を信じ名号を称える」という平生につくる業は正定業と言われ、「まさに浄土に生まれることを決定する行い」という意味です。それと同時にこれはまことに強い業なので「強縁」(こうえん)と言われ、またひとつたび決まつた往生は他からの妨げを受けないので「増上縁」(ぞうじょうえん)とも言われます。

このように浄土真宗の教えには、臨終間際でなく平生の生活の中で将来の往生のことが約束されるという大きな特徴があり、これを「平生業成」(へいせいぎょうじょう)と言います。これによつて、明日からの安定した念佛の生活が始まるのです。

「平生業成」とは、「平生の生活の中で、業事（往生の仕事）が成弁する（出来上がつてしまふ）」（しょくめいあがつてしまふ）という意味です。「平生業成」は大切なことばなので、記憶のどこかに納めておいてください。また、私がいつも「往生の予約切符」というのもこのことで、予約切符をいただくことによつてそれ以後の充実した毎日を送れるようになること（正定聚）(しょうじょうじゅ)と、今述べた臨終が迫つても慌てなくともいい上、お浄土に往生して成仏させてもらえる（滅度）(めつど)と死の縁、無量なり

いう、この二つのご利益があるのです。

筆者註：以上は、正定聚の人の現世での姿です。正定聚の人の来世については次の「阿弥陀様と本願（四）」に述べている通りです。

『執持鈔』より

わたくしにはく、

根機つたなしとて卑下すべからず、仏に下根をすくふ大悲あり。行業おろそかなりとて疑ふべからず、『經』（大經）に「乃至一念」の文あり。仏語に虚妄なし、本願あにあやまりあらんや。名号を正定業じょうじょうぎょうとなづくることは、仏の不思議力をたもてば往生の業まさしく定まるゆゑなり。もし弥陀の名願力を称念すとも、往生なほ不定ならば正定業とはなづくべからず。われすでに本願の名号を持念す、往生の業すでに成弁することをよろこぶべし。かるがゆゑに臨終にふたたび名号をとなへずとも、往生をとぐべきこと勿論なり。一切衆生のありますま、過去の業因まちまちなり。また死の縁無量なり。病にをかされて死するものあり、剣

にあたりて死するものあり、水におぼれて死するものあり、火に焼けて死するものあり、乃至、寝死(しんし)するものあり、酒狂して死するたぐひあり。これみな先世の業因なり、さらにのがるべきにあらず。かくのごときの死期にいたりて、一旦の妄心をおこさんほか、いかでか凡夫のならひ、名号称念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや。平生のとき期するところの約束、もしたがはば、往生ののぞみむなしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否は定まるものなり。平生のとき不定のおもひに任せば、かなふべからず。平生のとき善知識のことばのしたに帰命の一念を發得(ほつとく)せば、そのときをもつて娑婆のをはり、臨終ともおもふべし。そもそも南無は帰命、帰命のこころは往生のためなれば、またこれ發願なり。このこころあまねく万行万善をして淨土の業因となせば、また回向の義あり。この能歸(のうき)の心、所歸(しき)の仏智に相應するとき、かの仏の因位の万行・果地の万徳、ことごとくに名号のなかに撰在して、十方衆生の往生の行体となれば、「阿弥陀仏即是其行」と釈したまへり。また殺生罪をつくるとき、地獄の定業を結ぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて地獄にかならずおつべし。念佛もまたかくのごとし。本願を信じ名号をとなふれば、その時分にあたりてかならず往生は定まるなりとするべし。

阿弥陀様と本願（四）

「阿弥陀様と本願」も今回で第四回となり、先回までに四十八願のうちの第十願までお話しいたしました。今回はその次の第十一願からです。

今までにも私は、「浄土真宗は指定席の予約切符をいただく教えである」とお話ししてきました。それはどういうことかというと、「生きている今、この世での命が終わつたらお浄土に行けるという指定席の予約切符をいただくのだ」ということであり、そしてこの切符を手にした状態を信心と言うのです。またこの状態を「正定聚」とか「不退転」と言うのだということも、何度もお話ししているところです。この予約切符の根拠は、まさにこの第十

一願にあるのです。

第十一願 設我得仏、國中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覺。

私が成仏するとき、私の国（極楽）の人たちが、正定聚に住して、必ず滅度に至らなかつたならば、私は覺つたとは言いません。（必至滅度の願）

この第十一願には、

- 一、極楽の住人（この世から見ると「往生人」）は正定聚の人たちだけとする。
- 二、その人たちを必ず滅度に至らせる（覺りを開かせる、成仏させる）。

「立ち見席」はない

極楽の住人が正定聚の人たちだけだというのは、平たく言うと、指定席の予約切符を持った人たちだけだということで、そもそもそのために予約切符をもらつたからこそ、極楽に来ることが出来たのですから、一見当たり前に



吉崎のお山から北潟湖を望む



も思えます。

ここで、第十一願本文中には「国（極楽）中人天」とあることから、この第十一願は現世ではなく極楽に行つた上での視点で見ないといけないことがわかります。そうすると、予約切符を持つて来た人がどのように極楽で受け入れられるのかということが誓われているのであって、言つてみれば、そこでは全員が指定席に座ることになつていて、「当日売り切符」も「立ち見席」もなく、立ち見はできないということが誓われている、というところに力点があると、

わかつてきます。

さらに、つぎの第十一願が成就したことが説かれている部分（『大經（下卷）』願成就文）を拝読すると、この立ち見席のことがいつそはつきりとしてきます。

仏、阿難に告げたまはく、「それ衆生ありてかの國に生るるものは、みなことごとく正定の聚に住す。ゆゑはいかん。かの仏國のなかにもろもろの邪聚および不定聚なければなり。……」

とあり、「極樂の住人は皆、正定聚の人たちである。そのわけは、邪定聚と不定聚とがないからだ」とあります。

正定聚は予約切符を持つている人、つまり他力の信心の決まつた人のことです
が、これに対して邪定聚と不定聚というのがあります。邪定聚というの
は自力の修行（定善、散善など）を積んでその効力によつて往生しようとす
る人のこと、不定聚というのは念佛は称えるのだけれども他力でなく自力の

念佛、つまり念佛を称える効力をあてにして往生しようとする人のことです。

極楽の中でもその中心部分は「報土」^(ほうど)と呼ばれます。それは阿弥陀様の本願に報われた場所という意味で、本願が成就、つまり実現している場所ということです。阿弥陀様は「本願を信じ念佛する、いずれの行も及び難き凡夫」を迎えることを最優先とする本願をお立てになつたので、そのことが報われているのが、報土です。したがつて、正定聚という予約切符は、極楽は極楽でも、その中心のここ、報土に往生するための効力を持つてゐるのです。そこに「邪定聚と不定聚の人がない」と説かれているのは、これらの人たちが予約切符を持つていなければ、さきの「立ち見席」のことを思い出していくだと、いつそう実感が湧くでしょう。極楽の報土には、邪定聚と不定聚という立ち見席はないのです。

これにより正定聚の大切さが、つまり、今元気なうちに予約切符をいただいておく必要性が、いつそう明確になつてきたと思ひます。

親鸞聖人は、以上のことと讃えて『淨土和讃』に、

安樂国をねがふひと

正定聚にこそ住すなれ

邪定不定聚くに（國）になし

諸仏讚嘆したまへり

と詠まれています。

安樂国＝極楽、淨土。
諸 仏＝多くの仏様。

成仏はどこで？

第十一願の後半では、さらにこの切符を持つてゐる人には必ず覺りを開かせる（必至滅度）と誓つてくださつてゐるのです。ということは、この切符は、成仏の予約切符でもあることになります。

淨土真宗は、「生きている今、この世での命が終わつたらお淨土に行ける

「という指定席の予約切符をいただく教え」ですが、この第十一願に誓われているように、正定聚の位となつた人は、極楽に往生してそのまま覚りを開かせて（成仏させて）いただけるのです。往生できる身となること（正定聚）と、極楽で覚りを開くこと（滅度、成仏）が、このように、第十一願のお蔭で、縦につながつた一つのこととなつてゐるのです。しかしこの二つは、「今、この世での出来事」と「将来、極楽での出来事」という、明らかに別の時期、別の場所での出来事です。

このように、信心による利益は二つのので、これを「二益」と言います。蓮如上人は、このことをわかりやすく示してくださいとさつています。

問うていはく、正定と滅度とは一益とこうろうべきか、また二益とこころうべきや。

答へていはく、いちねんほつき一念発起のかたは正定聚なり。これは穢土えどの益なり。されつぎに滅度は淨土にて得べき益にてあるなりとこころうべきなり。され

ば二益なりとおもふべきものなり。

正 定＝淨土往生が決定すること。正定聚。

滅 度＝涅槃のこと。生死の苦を滅して覺りの世界に渡（度）ること。

一念発起＝阿弥陀様の本願を信ずる心が初めておこること。

穢 土＝煩惱や罪惡でけがされた世界。この娑婆世界。

（『御文』一一四）

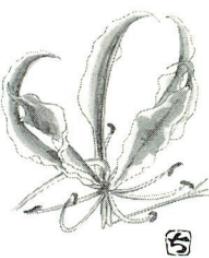
なぜ、そこまで厳格に二つに分けないといけないのでしょうか。

仏教の究極の目標である、覺りという最高の境地を得たいと思う願望は、持つていて当然だし、また持つていなければならぬものです。そこで、たゆまず修行を積むことによつて、生きているうちにこの境地を得ようといふ人のための教えが、聖道門です。これに対し、「私はいずれの行も及びがない凡夫であるので、阿弥陀様の本願力によつて来世に極楽に往生してそこで覚させていただくしかないのだ」と心を決め、念佛の生活をするのが、淨土門です。したがつて、この世での正定聚を覺りであると勘違いしてはいけ

ないです。

ところが、浄土真宗の歴史の中では、「一益法門」と呼ばれる異義（間違った教え）が度々起きました。それは、何の修行もしていないので、正定聚という段階をとばしてしまって、極楽でいただくべき成仏という御利益をこの世に持ち込んできて、「生きている今、成仏するのだ」と主張するものです。親鸞聖人も（『歎異鈔』第十五条）、覚如上人も（『改邪鈔』第十八条）、そして蓮如上人も（右記）、それぞれご苦心になつて懇ろに^{ねんご}誠めてくださっています。（二益について詳細は『第二十三部』参照）

邪定聚と不定聚については、いづれ第十九願、第二十願のところでもお話しします。



15

読者 の 頁

感想意見

横浜市戸塚区

青柳 省三さん

今回（第三十二部）は特に良かつたです。なぜならば、有名な「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という言葉の意味がようやく解りました。普通に、善人は往生できる。それはそうであろう。なんで悪人も当然のように往生できるのであろうか。凡夫には長い間解らなかつたのですね。ここで説明されているように、「修行を積むことの出来ない、仏道から離れよう、離れようとする者のことを悪人と呼び、浄土真宗はこの悪人のための教えである。」と言われてみると、なるほど、そだつたのかと、六十二年目にして初めて納得。悪人の見本のような小生でもきっと淨土へ行くことができるのでしょうか。

東京都武藏野市 鈴木 健太郎さん

今回（第三十二部）六頁からの「極楽の人々はどんなパワーを持つていてるのか？」を特に興味深く拝見いたしました。

私の曾祖父の戒名は宿命神通居士というのですが、それがどういう意味なのか、また仏教の戒名なのになぜ神という字が入っているのか長年疑問に思つておりました。今回六神通についての御教示を拝見したお陰で、長年の疑問を一気に解決することができて大変ありがたく思つております。また煩惱が膾のように流出来るので漏というのだと初めて知りました。

平成二十年三月二十三日

あとがき

みめぐみの刊行委員会

三十三部では三つのお話を頂きました。

はじめの「ほととぎす」では、嵯峨野の寺務所の身近な出来事から、世間話の様な形で、お念仏の大切さを教えて下さっています。

次の「死の縁、無量なり」は覚如上人の『執持鈔』よりタイトルを引用されたお話。最後は連作の「阿弥陀様と本願（四）」で、第十一願の解説です。本文にもふれておられますが、二話と三話は全く別のことのようですが、実はどちらも「正定聚の人」のお話です。

今回の表紙絵の「むらさき」について、いつも表紙絵を担当下さる禮子裏方より「古くは万葉集にも出てくる、夏に白い小花を付ける花ですが、古来から根は紫色の染料として用いられてきました。そこから“むらさき色”という名が付きました」と教えて頂きました。

皆様からのご感想・ご意見、ご質問お待ちしております。どしどしお寄せ下さい。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円(税込)です。

○1冊～4冊=送料及び振替手数料(70円)はご負担下さい

※送料 1冊=120円、2冊=160円、3冊=180円、4冊=210円

○5冊～9冊=送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊=210円、7～9冊=290円

○10冊以上=送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です(ご住所には郵便番号をお忘れなく)。

みめぐみの 第33部

2008年7月5日 印刷
2008年7月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社



みめじみの刊行委員会刊